

参院選が終わりました。若者の投票率の低さや、女性議員の数の少なさを嘆く声が聞かれます。「障害者が十分な選挙情報を得られなかつた」という苦情も、総務省に寄せられました。

対照的なのが北欧です。投票率は8~9割をキープ。若者の投票率も高いのです。各党のホームページには知的なハンディのある人にも分かりやすいページや、目が見えない人のために音声に変換しやすいページが設けられています。

比例代表制をとる北欧諸国では、候補者リストを載せた政党ごとの投票用紙「リスター」が、街のあちこちに置かれています。有権者は意中の党のリストを選び、投票箱に入れるのですが、順位を変えたり気に入らない候補者に×をつけたり、書き足したりもできます。

2005年9月に訪ねたノルウェーは、選挙戦の真っ最中でした。街の目抜き通りに、緑や赤のシンボルカラーの「選挙小屋」が政党ごとに建ち、選挙ボランティアがコーヒーをあめを



私の社会保障論

## 選挙で学ぶ民主主義

北欧、若者も高い投票率を維持

大熊由紀子 国際医療福祉大大学院教授

1971年には女性たちが、男性候補に軒並み×を付け、女性の名前を書き加えるという組織的作戦を展開。市議会に女性議員を大量に送り込みました。このような歴史を経て、86年には18人の閣僚のうち8人が女性という内閣が誕生しています。リスターと選挙小屋は、子どもたちが民主主義を学ぶための、優れた小道具にもなります。スウェーデンの中学校で、選挙と民主主義を1週間かけて学ぶ様子が、ユーチューブで公開されています。生徒たちは月曜日に選挙の基本を学んだ後、各党の選挙小屋を訪ねてインタビューします。水、木曜日にこれらをまとめ、各政党の主張を比較しながらクラスメートの前で発表。金曜日には、意中の政党の「リスター」を投票します。

こうした試みは60年代から始まりました。98年からは全国統計が作成され、青少年局の特別ページに学校ごとに載るようにトを手に、党の政策を熱をこめて説明していました。市民も真剣に質問していました。

選挙権も被選挙権も18歳からあり、これが若者の選挙への関心を高めています。デンマークでは、さらに16歳まで引き下げる案も検討されています。

市議は必要な手当のほかは給料なし。現職の教員、看護師、ヘルパー、警官など、あらゆる職種の人々が市政に参加していることも、若者の政治への関心を深めているようです。

子どものころから政策を学んで選ぶという「血の通った民主主義」が、日本でも芽生えることを願っています。



年齢別投票率格差

国レベルの議会選挙について、16~35歳の投票率(%)と55歳以上の投票率(%)の差を比較して、16~35歳の投票率(%)と55歳以上の投票率(%)の差を表示。金曜日には、意中の政党の「リスター」を投票します。

国で38.5%、25.5%の日本、23.5%の韓国が続く。北欧はスウェーデン3.5%、デンマーク6.5%と、年齢による投票率の格差が少ない。